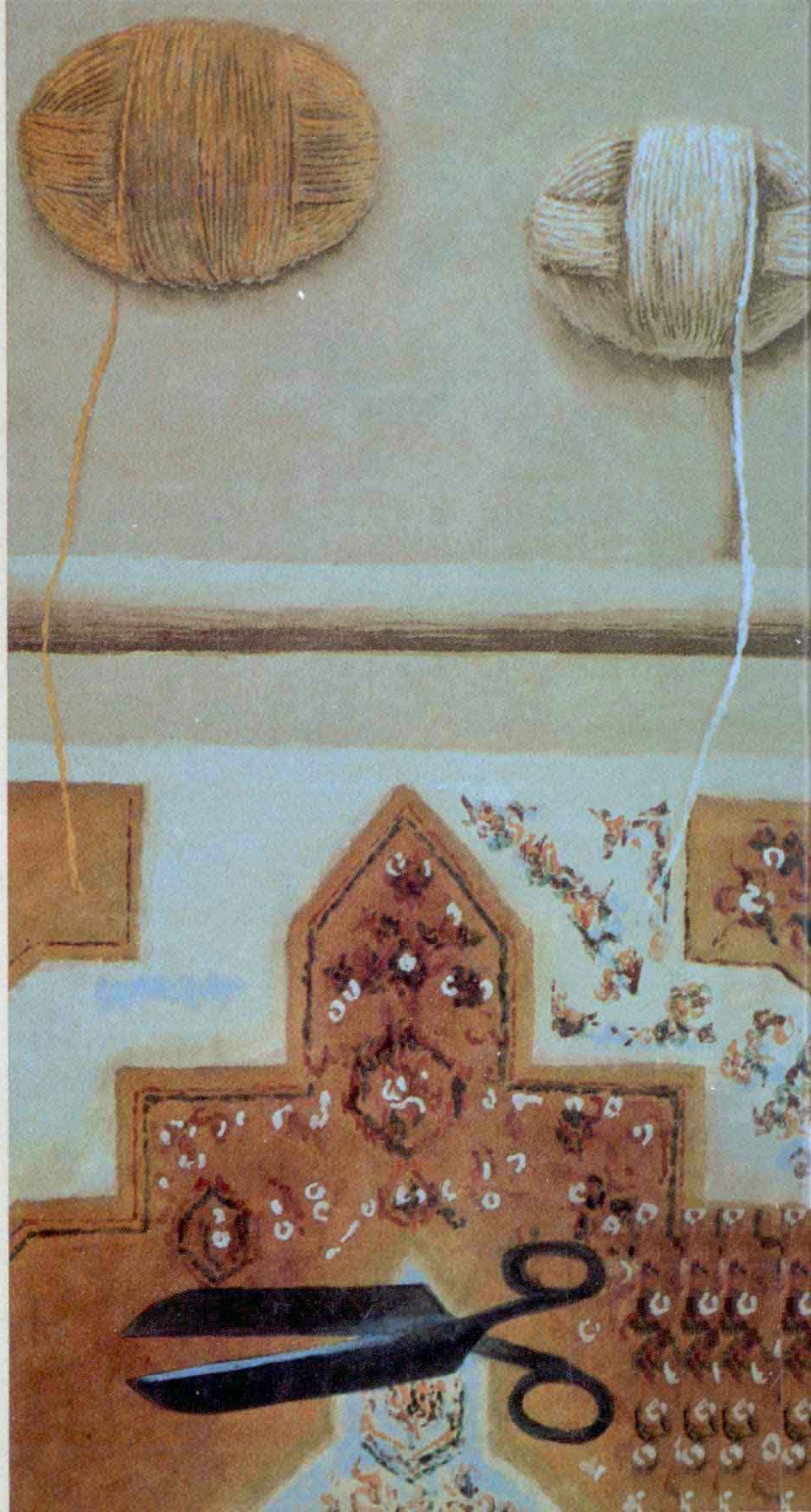


編集兼発行人

山本夏彦

中公文庫



中公文庫 ©1980

編集兼発行人

昭和五十五年十月二十五日印刷
昭和五十五年十一月十日発行

著者 山本夏彦

発行者 高梨 茂

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

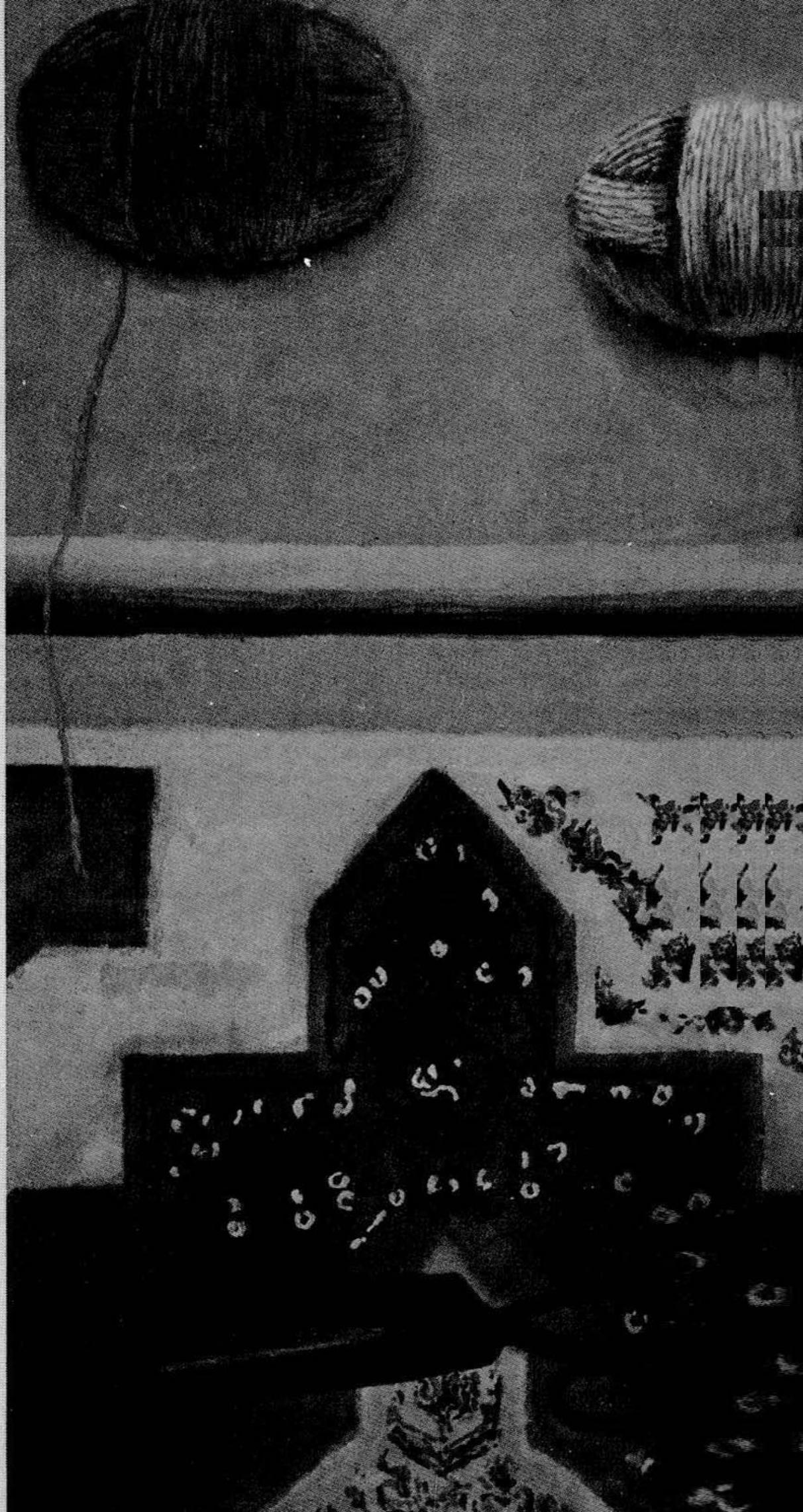
振替東京二―三―四

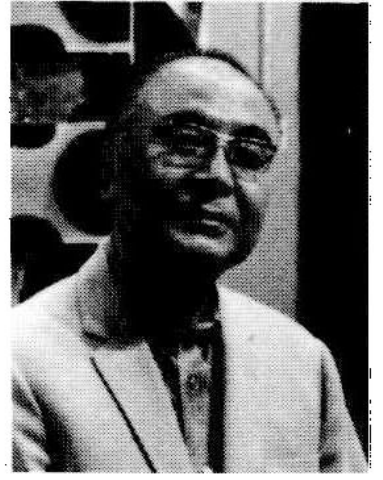
定価 二八〇円

編集兼発行人

山本夏彦

公文庫





著者紹介

やまもと なつひこ
山本夏彦

昭和十四年、二十四歳のとき「年を経た鰐の話」その他を「中央公論」に発表した。それらは一卷にまとめられ、昭和十六年桜井書店から出版された。戦中戦後、二、三の雑誌社出版社で編集と営業をおぼえ、昭和二十六年以来、工作社を主宰している。昭和三十年、「室内」を創刊、「日常茶飯事」を連載した。主な著書に「日常茶飯事」「茶の間の正義」「変痴気論」(共に中公文庫)「笑わぬでもなし」「ダメの人」(共に文藝春秋)「かいつまんで言う」(ダイヤモンド社)「二流の愉しみ」(講談社)等がある。

目次

はしがき

編集兼発行人

編集兼発行人

毎号及び時々寄贈

解題

背骨まがり

人生は短く本は多い

袖の下

チップ出す人

赤線復活

54

テレビの正義

60

袖の下

66

ご用聞き

72

新年と老年

習慣重んずべし

80

年賀状

86

我らの前なる老年

92

門松

98

ご先祖様は生きている

104

銭形平次三八〇回

弁償せよ弁償せよ

112

銭形平次三八〇回

私の十八番づくし

鉛筆の削り方ゼミナール

君には忠

人みな飾って言う

人みな飾って言う

電話の片っぱ

オイコラ考

コラムの言葉

男の血の道

輪転機と言論の間

あとがき

183 176 169 162 156 150 144

136 130 124 118

編集兼発行人

はしがき

「小説新潮」の「社会望遠鏡」という欄に、しばらくコラムを書いたことがある。ながく河盛好蔵氏が担当していた欄だから、この話があったとき、喜んで引きうけた。今回のこの本はそのなかから選んだものに、「室内」に書いたコラムを加えたものである。

立読みは本屋はいやがるが、著者は必ずしもいやがらない。たとえば、このなかの「オイコラ考」「私の十八番づくし」の如きは僅々八ページを超えない。ご用とお急ぎのないかたは、お手間とはとらせないから立読みしていただきたい。読者と著者の仲は不思議な縁で結ばれている。その一編を見れば、縁の有無は明らかになるだろう。

著者のためには買わずとも読め、書肆しょしのためには読まずとも買えと、むかし斎藤緑雨は言ったが、このことは今も昔も変わらないように思われる。

昭和五十一年春

著 者

編集兼発行人

編集兼発行人

編集兼発行人楓井金之助という名を、少年のころ、私は新聞の奥付おくづけでおぼえた。楓井はむずかしい字で、カエデキと読むと、そのとき私は知った。

奥付を見ると、けし粒大の字でこの名が出ていた。それを見るときもなく見て、毎日のことだからおぼえたのである。以来四十余年たったから楓井氏はもう故人だろう。縁もゆかりもないこの人を、死ぬまで忘れないとは思議といえば不思議である。

私は奥付の読者である。奥付は文字ではあっても、文章ではないから、読者と称してはおかしいが、やはり読者である。新聞や雑誌の奥付は、スペースは小さく見るに値しないが、それでも私は見た。書籍の奥付のほうは、巻末の一ページを占めて、定価もここに出ているから、必ず見た。

奥付は戦後はなくていいものになったが、戦前はなくてはならないものだった。発行年月日、編著者氏名、印刷人氏名、発行人住所氏名を明記することが、法によってきめられていた。法

というのは新聞紙法のこと、これは明治初年の讒謗^{ざんぼうりつ}律にさかのぼる。ざんぼう律とは政府を罵^{のの}詈^りさんぼうしたら取締るぞという法で、いかにも悪法らしい感じが出ていていい名である。著者と発行者の氏名を並記させるのは、その必要が生じたとき、訴えたりつかまえたりするためである。

私は本の奥付を愛読して、印刷人のところで井上源之亟、山田三郎太、木呂子斗鬼次の名をしばしば見た。井上山田両氏は凸版印刷株式会社とあったから、その社の責任者だろう。少年の目にそれは男らしい名に見えた。昭和初年でも三郎太はもうめったにない名だったから、たぶん老人だろうと私は勝手にきめていた。

当時わが家にごろごろしていた古本に、縮刷本の漱石全集や一葉全集があった。漱石全集の著者は夏目金之助で、発行者は和田むめである。発行所は春陽堂で、電話本局〇十〇番である。大正何年何月何日に初版を印刷発行して、版を重ねること十何回、そのつど発行年月日を書いてある。十版なら十行、十五版なら十五行、それは一行ずつ並んでいたから、子供の私は丹念に拾って読んで、そんなに売れたか、それなら名著なのだろうと感心した。

べつに著者は夏目金之助とあるから、漱石は号で、金之助は本名だということが分る。和田むめとあるから、これが春陽堂の女主人だろうと分る。春陽堂は今振わないが、明治大正時代は一流の版元で、漱石の本はたいいここから出ていたことが、奥付裏の広告で分るのである。

あの木呂子斗鬼次という名は、この店の印刷人のところでおぼえた。

奥付を読むのは、私だけではないとみえ、のちに書物の奥付は、次第に意匠をこらすようになった。今でいうレイアウトを工夫するようになった。それについても話したいが今は略す。

昭和二十年まで新聞雑誌と書籍は、たとえ謄写版で印刷したもので、納本する義務があった。納本しないと罰せられた。新刊が出ると、だから二部を見本として内務省へ届けた。それを役人が検閲して、別条なければ発売することが許されたが、あれば注意され、沢山あれば発売は禁じられた。責任者は出頭を命じられ、事と次第によれば訴えられ、なかなか釈放されなかった。

明治時代の新聞は、規模も小さく、発行部数も少なかった。記者は社会の木鐸ぼくたくと称して、利によって動くことを潔いさぎよしとしなかった。義によって動いた。義によれば、自然ながく一社にとどまっていられない。意見が対立すれば争って、直ちに去ることを繰返した。それはさながら去ろうと待ちかまえているようだった。力ある大記者は、自分で新聞を創刊したから、去っても頼る新聞社には困らなかったのである。

たとえば、斎藤緑雨は「今日新聞」に二度はいつて、二度追われている。「自由の燈ともしび」というのにはいつて、ここは改革沙汰がおこって除名され、「朝日新聞」にはいつて、少しは取立てられたが退社した。(略)「国会新聞」、「改進黨新聞」はなまけ者だという理由で逐われた。「二六新

報」にはいり、「時論日報」にはいったが、われを迎えるほどの社の、どうして倒れないことがあるう。もう新聞とは縁をもつまいと思ったが、またまた「萬朝報」にはいつて、ここは自分からやめたと回顧している。それが明治三十二年、この夥しい進退は僅々十余年間の出来事だという。

今の新聞記者は朝日から毎日へ、また読売から毎日へと移ること少いが、以前はしばしば移ったのである。

緑雨の志は文章にあって、政治にはなかったのに、それでも法にふれて、「今日新聞」では七週間の発行停止を招いている。「萬朝報」でも一度は官辺の忌諱にふれているから、志が政治にある記者なら、いくらふれるか分らない。

編集人と発行人の二人が訴えられ、牢屋にいれられると、当時の新聞は出なくなる恐れがあった。だから、編集兼発行人と称して、一人で二人を兼ねたのである。兼ねれば被害は一人にとどまる。しかも、社内で重要でない人物に兼ねてもらうと、重要な二人は共にまぬかれる。

これを名義人という。法は表にいる名義人を罰して、裏にいる執筆者を罰することができない。窮して考えたした苦肉の策である。

それが昭和になってもまだ残っていたのは、その必要があったからである。

たとえば、天皇陛下を、天皇階下と誤って印刷すると、右翼は勇んでかけつけた。右翼なら金